

真実の礎 7 話(14.5 話、15.5 話、16.5 話まとめ)

コメディ『派遣国会議員』外伝『真実の礎』第十五. 五話:歪められた想い 前編(小野哲・Neutralizer)、コメディ『派遣国会議員』外伝『真実の礎』第十六. 五話:歪められた想い 後編(小野哲・Neutralizer)を今回再編集しました。

1

「何でアンタ達がここまで腑抜けなの!?!」

札幌のリブゲート選挙不正支援事件発覚から2日後…。

金髪の女を目の前にきびきびとした口調で女が怒鳴りつける。リブゲート副社長の久世留美子である。メアリー・ジェーンら三人はしゅんとしている。

「まさか札幌で杉山泰蔵が完オチするわ、竹下が寝返るとは予想外よ。だいたい、デカの目の前で何であんな事をやらかしたのよ!普通はカーテンぐらい敷くでしょうに」

「申し訳ありません…」

「い、いやなんぜザツがづげでだどば…」

とドワイヤーが言い訳をすると

「スカボンタン!!そんな言い訳が通ると思ってんのかい!?!」

とジェーンが彼を一喝する。

「ずびばぜん、ジェーンざま…」

「はあ、アンタ達には呆れて物も言えないわよ」

「そ、そんな事仰らないでせめて僕ちゃん達に今一度チャンスをいただけないでしょうかねえ?」
とステビンズが懇願する。

「いいわ。次の指示が来るまで全員謹慎。もちろん今回の逃走にかかった費用は全てあんた達もちね。いい?」

「は、はいもちろんですとも」

ジェーン達三人は生氣を取り戻す。

「分かったらとっとと出て行って!それから費用はこの通りだからね!」

久世は三人組に請求書を突きつける。

「は…はい分かりました。ステビンズ、ドワイヤー、行くよ!」

「アラホラサッサーツ!!」

「ずいぶんカリカリしているな」

「そうよ、今回の逃走にかかった費用は15万円だけど、奴らには3倍の料金を提示しておいたわ」

「おいおい、ぼったくりじゃねえか」

一ノ瀬優は顔をしかめる。リブゲートの手配した運送会社のトラックの荷台に詰め込ませて苦小牧漁港まで行かせ、現地の漁師に金を積んで遠洋漁獵のついでに相乗りさせ、千葉の白浜漁港まで行かせ、そこからトラックで川崎のリブゲートタワーにまで来させたのだ。

「まあ、そんな事よりお熱いのを頂戴。今日はどうするかしら」

「あんたには様々利用させてもらっているんだ。だが、気になるのはホスト二人がまだ帰ってこないって事だ」

「陸と涼介の事?ああ、シルキーキャンディの仕事ね」

「仕入れの帰りに電話があっさりして連絡がこねえ。サツが動いていやがる」

そう、一之瀬はあのホストクラブ『マボロシクラブ』の店長なのだ。

「まずいわねえ、あいつらにも連絡いれとかなないと。下手をすればあっちから足がつく可能性もあるわ」

久世は携帯を出して掛ける。

「もしもし、アンタのところの三人組相当なポカをやってくれたわよ。あそこまでマヌケとは思わなかったわ!!」

「そうか、それは申し訳ない事をした。後で私のほうからもきつく灸を据えておこう」

電話の相手はジェーン達三人組を手下に持つマフィア『シンセミア』の首領、グスタフ・ゼルマンである。尚この『シンセミア』、表向きは東京にある警備会社『ツェルベルスガード』を名乗っており、当然ゼルマンは当社の社長である。

「随分余裕な言い方ね、まあいいわ。こちら側に今サツがうろうろしているのよ、アンタのところは大丈夫でしょうね?」

「フツ、心配はない。奴に命じてルートをうまく隠しているからな。だが貴方の忠告は受け入れよう、バレないようにルートを更に増やす。例え一つ潰れてもサツは全部を潰せまい」

「ああ、アンタが雇ったあの男ね、さすが『闇』の異名を取るわねえ。でもあえて念を押しておくわ、アンタの会社の株を私のところも持っているんだから」

「もちろんだ、副社長さん。筆頭株主である貴方のところと我が社は一心同体だからな…」

「そういう訳だ、ヤイバ君」

久世との電話を終えたゼルマンはソファに座っていた男『闇のヤイバ』に言う。

「了解した社長。キルボーンと共に新たなルートを確保しておこう」

とヤイバは答える。尚キルボーンもまたゼルマンの手下である。

「君のおかげで我が社は安泰だ、といってもこの会社は表向きだがな。いつでも撤退は可能だ」

「成程な、この俺もここを隠れ蓑にする事ができるわけだからな。俺も社長には感謝している、あのちっぽけな情報屋で人生を棒にふりたくなかったのだな」

「ああ、『ダークシャドウ』だったな。君にはあそこは小さすぎたかな?」

「そういう事だ、俺はあの月光のやり方にウンザリしていた。そこへアンタからのお誘いだ、渡りに船とはこの事だ」

「クッククク…そうか。ああそうだ、あの三人組だが君の方から灸を据えといてくれないか。私がやるのもいいがあの女が私に甘えるのだな」

「それも了解した。任せてくれ…」

「はあ…」

深夜一時。

高野広志はようやく愛車のポルシェ(エンジンは水素ハイブリッドエンジン)から降りてきた。部屋に向かう。くたくたな表情である。婚約者の久住美紅が鍵を開ける。

「ただいま…。遅くなってすまない」

「仕事の関係なら仕方がないわよ。まさかシルキーキャンディに関わるなんて…」

「ああ。自殺未遂をやらかしてここまで遅くなった。一人は今仁清さんが取り調べに当たっているんだ」

「明日非番でよかったわね」

「ようやくさ。まあ、エバンス卿とも話せる事だし、久々にゆっくりするさ」

「私は明日買い物に行ってくるね。挙式のドレスから指輪ぐらい選びたいし…」

「すまないな。本当は俺も行きたいところだが…」

広志は非番とは言っても自宅待機せざるを得ない。公権力乱用査察監視機構(通称 GIN)と日本連合共和国の主要都市に張り巡らされた警視庁特別捜査 1 版、通称ゴリラはかつてはぎすぎすした関係だったが、今は連携し、不正を最小限にとどめる仕組みとなっているのだ。

「今日はさばのカレー煮か。これはいけるね。青物と一緒にうまい」

「おい、奴らが出てきたぞ」

「黒田さん、本当に始末に負えませんね」

黒田勘太は紅谷留美から文句を言われる。二人ともゴリラ上野・浅草署配属の警察官であるのだが、リブゲートの不正を水面下で調べる関係で応援にまわされているのだ。

「親分探偵の内偵では一之瀬と久世は相当深い関係にあったようですね。歌舞伎町のホストだった一之瀬のパトロンが久世らしいです」

「ましてや歌舞伎町だぜ。ソーブランド経営者の知り合いがぼやいていたが、シルキーキャンディの販売が広がっているようだぜ」

「そこに黄色い馬と複合していますからね」

タバコに火をつける勘太。

「どこに行くんでしょうか」

「恐らくは、川崎のアジトではないのか」

その久世達を黒田達とは別の所から見ている人物がいた、二代目月光とジュウザである。

「あいつらか…『マボロシクラブ』の頭は」

「ああ、しかもあの二人はできてるべ。それだけではねえ、『シルキーキャンディ』って聞いた事あるか?」

「!!ああ、警察では『絹飴』という隠語で呼ばれてるあれか。あれが出回ってるのか?」

「そうだべ、それを広めてるのがあいつらと『ツェルベルスガード』っていう警備会社らしいべ。あいつがそこに潜んでいるらしいとの姉貴からの情報だべ」

「あいつ?」

「『闇のヤイバ』だべ」

「確か、元仲間の…」

「『元仲間』でもなんでもねえ!!あいつは裏切り者だ、親父のやり方に反発して出ていったんだべ」

「でもシズカちゃんは…」

「ああ、シズカはあいつを慕っていたが俺はあいつが嫌いだった。懷に冷たいものを感じてたからな、だが今回の調査で知ったシズカは落ち込んでるべ」

「そうか、その警備会社も調べる必要があるな。じゃ、これは今日の報酬だ」

ジュウザは金が入った封筒を二代目月光に渡す。

「確かに受け取ったべ。だがツケはまだ残ってるからな、ちゃんと払ってくれよ」

「ああ、シズカちゃんとの約束があるからな」

「はあ、女との約束だけは覚えてるんだべなあ…」

二代目月光はため息をつきながら言う。こうして夜が過ぎていった…。

翌日…

「じゃあ、行ってくるね。気をつけてね」

「ああ。どうやら今日はゆっくり寝られなさそうだ」

広志は苦笑いしながらドアを開ける。彼がオーナーになっているマンションに今日二人越してくる。小津麗と山崎由佳が吉川氷柱、フラビージョーと美紅の買い物に付き合うのだ。彼らの行き先は最近できた横浜輸入特別地域内のブランド店「横浜シーサイドタウン」。日本連合共和国が小さな商店街とスーパーブランドの結合を図る目的で作り上げた経済特区であった。

自宅の一室で刑法全書を広志は素読していた。そうする事で犯罪者に対してすばやく戦う術を得られるのだ。ゴリラ上野・浅草署の巡査で司法書士の資格を有している黒崎高志もそのような努力を怠らない。

「おはよう、遅かったじゃないか」

「あいかわらずだなあ」

ゴリラの中国人犯罪者の通訳を務める河了テンが声をかける。今日はマーボー豆腐を差し入れてきたのだ。

「今度来るのは野田恵と千秋真一って奴だけど、ヒロ引越の手伝いする？」

「出来るだけ引き受けるつもりだが…」

「無茶すんな。俺が引き受けてやるさ」

李信が広志の肩を叩く。

「本来だったら俺は横浜シーサイドタウンで買い物する予定だったがあの事件じゃ、お手上げだな」

「彼女は分かっているさ」

そこに現れたのは80歳くらいだろうか、それでも顔には明るさが失われていない。

「エバンス卿、お久しぶりです」

「相変わらずのようだね、ヒロ」

「そうですか、イングランドでも魔性の飴が流行しているようですね」

「女王陛下も頭を抱えていらっしまった。闇の無秩序には本当に困らされる」

アンソニー・エバンス卿はイギリス出身のピアニストである。30年前から日本を拠点に演奏活動や教育活動をしている。12年前のロンドン五輪で広志が柔道代表として金メダルを取った際に知り合って、それ以来の親交だった。

「マーガレット女王陛下はお元気でしょうね」

「女王陛下はヒロの差し入れをたいそう喜んでいらっしまったわ」

リンダ・エバンスは微笑む。広志や美紅では英語をどんどん使える。ましてや広志が美紅と結婚する事を決めた際には立会人の一人として記名したほどだ。

「今度の演奏会ですけど、入り口のグランドピアノを見ましたか」

「どこから手に入れたんだ？」

「東北地方の中学校が統廃合でなくなったんですよ。その時にグランドピアノと音響装置を譲ってもらいましたよ」

その時、部屋のチャイムが鳴る。広志が出る。

「あのお、大家さんですか？」

「俺が大家だけど？」

「ヒャッホー!ありがとうございます!!」

びっくりする広志に飛びついてくる女性。アンソニーはびっくりしている。青年が女性を諷める。

「のだめ!!」

「すごいですう、一体どうやってお知り合いになったんですか」

「彼と知り合ったのは偶然だよ」

「いや、そうではないでしょう」

鋭い目つきで千秋真一は広志に尋ねる。

「あなたの部屋の看板からひょっとしたらと想いましたけど、そうですね。あなたはロンドン五輪の金メダリストでしょう」

「それはここでは関係ないさ。まあ、エバンス卿と俺の波長がマッチしただけの事さ」

「そうだね、君の言うとおりで」

「君達は川崎シチズンオーケストラを立ち上げたが、演奏会はどうするつもりだ？」

「まだコンサート会場は確保できていなんですよ。困っちゃってます」

「それにしても、あなたのマンションはホールがあるほど広いんですね」

「昔、ここに川崎市が所有していた中学校があったんだ。俺のマンションはその校舎を生かしつつ、最小限に改装した。ゆえにコンサートホールとして残っているのが体育館跡地なんだ。良かったら、コンサートホールを使って演奏会を開いてみないか？エバンス卿も一ヶ月に一度やっているんだ」

「本当ですか？」

千秋が驚く。広志はうなづく。

「良かったら、エバンス卿とジョイントでやってみたらどうか？」

「もちろん、私も賛成するさ」

千秋の目に輝きが戻っている。

「お願いします。これでみんなに報告できます」

その時、広志の携帯電話が鳴り響く。

「ビーッ、ビーッ、エマージェンシー！エマージェンシー!!」

その2時間前…。

美紅は途中で合流した美墨なぎさ、雪城ほのか、そして広志の実の妹である九条ひかりと一緒に買い物を楽しんでいた。

「このドレス、どう？」

「美墨さん、ちょっと華美すぎるじゃない？」

「お兄ちゃんがここにいたら話にならないかもね」

ひかりが言う。広志は贅沢をあまり好まない性格だからだ。そこへ由佳が陰しい表情で美紅に駆け寄る。

「ちょっとおかしい人を見つけたわよ」

「えっ？」

「おい、あれを持ってきたか」

「S切れそうなんだ。早く俺に渡せ」

イケメンが野暮ったい中年の男に鋭く小声で怒鳴る。近くには金髪の女が控える。

「あんたが飴を作らないとだめでちゅ。あたしだって切れかかっているんだしい」

そう、彼らはあの魔性の飴、シルキーキャンディの製造担当と販売担当だったのだ。この魔性の飴をチャイニーズマフィアは外注で作らせていた。その拠点メンバーに選ばれたのがいずれも失業中の男ばかりで彼らは当然覚せい剤中毒にされていた。

「リカ、さっさと終わらせてズラかるぜ」

「この前札幌でガサ入れがあった事だし」

この会話をなぎさが聞き耳を立てながら聞いていた。

「あいつら、やばすぎるよ…」

「なぎさ、あいつらを引きつけておいて！由佳は警備員に連絡して！」

「私はタカに連絡しておくわ」

氷柱は婚約者の黒崎にすばやく連絡を取り始める。それとは露知らず3人は荷物を交換するとすばやく動くとする。そこになぎさがわざとぶつかる。

「ちょっとあんた、あたしのおしりに触ったでしょ!？」

「ちがう、そいつは誤解じゃないか」

「それにこの手に持ってる荷物、一体なんよ!？」

「…!!」

「あんた達、シルキーキャンディの売人達ね!」

「こいつ!!」

金髪の女がなぎさに襲い掛かる。だが、広志から死ぬか生きるかの修行を望んで受けているなぎさには通用しない。なぎさの右腕が一閃すると女の胸を直撃する。苦痛にもだえる女を無視しながらなぎさはイケメンに襲い掛かる。

「こいつ!!」

「あたしだって男相手に戦ってるんだから!」

なぎさの修行は半端ではない。広志やトダカ、ディアツカから総合格闘技というべき修行を受けているのだ。さらにGINでは特攻隊の最前線に自ら志願して戦っている勇敢な女性なのだ。イケメンの顔にあざが事ごとく出来る。それでもなぎさは決して手加減しない。野暮ったい男はきよろきよろと周囲をうかがっていたが突然崩れ落ちる。さらに動きにくかった女が麗の手を振り払うと逃げ出す。

「待ちなさい!!」

「逃げてても無駄よ!」

麗、ほのか、ひかりが女の追跡を試みる。だが、女はスプレーを取り出して3人の顔に吹き付ける。そしてイケメンは口で何かいじくっていたが飲み込むなり倒れこむ。

「ゲホゲホ、これ、唐辛子スプレーじゃない」

「なんて奴…」

「氷柱!」

「タカ!ごめんね、こんな事になって」

「怪我はなかったか?」

黒崎は氷柱達の無事を確認する。一緒についてきた巡査部長の柴田竹虎は男の服の中身を見る。中から白い顆粒の入った筒が見つかった。

「これは覚せい剤だ。間違いないよ」

「じゃあ、あのイケメンは覚せい剤販売に関わって…」

「そうだろうな。とんでもない事に巻き込まれてしまった」

苦々しい表情の黒崎。イケメンは意識を失っており、すぐに病院に運び込まなければ状態は危ないのは明らかだった。

「シバトラ、札幌の一斉検挙といい、こいつは組織的犯罪のにおいがするぜ」

「僕もそう思う。昨晚のシルキーキャンディの検挙で売人二人が自殺未遂を起こしたけど、それと同じだよ」

その頃、五車星出版社では…。

「バット」

と編集長のリハクがバットを呼ぶ。

「編集長、何か?」

「君、先週の『人物発見伝』のコーナーについてだが」

「ああ、高野広志という人物についてですか?」

「そうだ、どこで彼についての情報を手に入れたんだね?」

「実はドン・ドルネロの元秘書をしていたという野々宮ノノという女性と知り合いまして、彼女からいろいろと聞いたんですよ」

「ほう、記事に書いた事かね?」

「はい、彼女は十年前のテロの時に高野を彼の婚約者である久住美紅という女性と共にサポートしていたんですよ。それで彼の事をよく知ってます」

「ふむ…」

リハクは考える顔だ。

「あの…、編集長、あの記事は書かなかったほうがよかったでしょうか?」

「いや、私からは言う事はない。ただ、今の情勢からして情報提供者のプライバシーに関しては大丈夫なのかね?」

「はい、勿論彼女の名は伏せましたし、その高野広志なる人物についても詳細な部分は伏せておきました。ケンにも見てもらって細心の注意は払っております」

「ならばいいが…」

「どうかしましたか?」

「うむ、いやな予感がするのだ…」

とりハクは顔を曇らせた…。

一方、美紅達のほうは…

「何だって!?美紅がシルキーキャンディの販売現場に見合わせたって!?」

「うん、売人が製造担当と思しき男から受け取っていたのを見たのよ」

「怪我はないからほっとしたが、とんだ事になってしまった」

「昨日の事件と同じだけど、警察に捕まって一定の間抵抗していたらみんな自殺する傾向でしょ」

「組織の中で相当なマインドコントロールがされている証拠だな」

美紅の元に広志、GIN 顧問を務める安西晋三、イギリス空軍特殊部隊から GIN に転じた財前丈太郎が陰しい表情だ。

「こいつは間違いない、権力犯罪だ」

「ああ。私も同感だ。今回発端が川崎国分署で覚せい剤中毒が多発したのに警察が何も動かなかったというクレームから始まっている」

「そうですね。署長という若原は水面下捜査によるとリブゲートから相当な接待を受けているようです」

「それだけでは我々は動けないが、鍵になるのが今回の売人がいずれもマボロシクラブに関わっている事だ」

「いや、それだけではありませんよ。今回自殺未遂を起こした黒杉輝(ひかる)は大学 2 年生でしょう。この前の学生の黄色い馬ルートと関連付けて調べる必要もありますけど、俺の推理から別のルートがあるのではないでしょうか」

「そうか…。バイト先があったか…。あけぼのストア経由もありうるな…」

「あの店でもクレームが殺到していますからね」

そこにまたしても広志に携帯電話が鳴り響く。

「もしもし、高野です」

「ドルネロだぜ。お前さん、週刊北斗に俺らの関係が暴かれているぜ」

「うーむ…。やられましたか…」

「お前さんに判断は一任するが、俺は伏せておきたい」

「そうでしょうね。でも、いずれにせよ説明は避けられないでしょう」

「そうくると思ったぜ。俺はそうになったら協力する。どうやら絹飴でやばい山場に差し掛かっているようで気を付けろ。リブゲートは闇の世界の貯金箱だからな」

広志は苦笑しながら電話を切る。

「週刊誌に暴かれたようだな」

「週刊北斗ですから、俺から説明に上がりますよ。それよりもブツを作っていたホシの身元は?」

「豊山勝彦。中国から出稼ぎに来ていて 10 年規定で日本国籍を取得した奴だ」

「なるほど…」

「死因はニコチンによる中毒。奴のポケットにニコチンの塗られた毒針のついたコルクが見つかった」

彼ら中年になると景気の回復でも成績主義により契約社員とされるのがオチだ。しかも、アルバイト兼業も容認されている現状ではやばい仕事に走るのも無理はない。

「ヒロ、気になる人がいるのよ。あのフラビージョさん。ヒロの話を聞くや否や、そわそわしだしたのよ」

「分かった。これは背後関係をこっそり弁護士に頼んで調べてもらうよ。兄貴が来ている。黒杉の部屋に行こう」

「すまない…。俺の従姉妹がこんな事件に巻き込まれてしまった…」

遠野ケンゴは妻の岬と一緒に泣き崩れる女性を慰めながら広志に詫びた。

「今回の事件は相当深刻な事件なのは確かだね。兄貴、こんな事になろうなんて」

「ごめんなさい…。私が彼をしっかりと支えられなかったから…」

年は二十歳ぐらいか、黒い髪の毛の女性が詫びる。ケンゴの親戚に当たる遠野百合子だ。黒杉は百合子の彼氏に当たる人だったのだ。

「ヒロ、絹飴の捜査に当たるべきじゃないか。こんなに思っている人を引き裂いた魔性の薬剤を許すわけには行かない」

「俺からもお願いする。この通りだ!」

ケンゴはそういうなり頭を病院の床につけて頼み込んだ。泣き崩れる百合子を支える美紅。その眼には怒りが込められている。

「ヒロ…。私も百合子さんの気持ちが痛いぐらい分かる…。私は百合子さんを支えるから、ヒロはシルキーキャンディを潰して!」

「美紅…。分かった、俺が指揮を取る!全ての責任を俺が背負う!!」

「おい、これは一体どういうわけだ!二日連続で売人が検挙されて黒杉がああ体たらくとは一体どういう事だ!」
一之瀬が金髪の女をつるし上げる。インドネシア人の男が刺青を見せながら迫る。

「それとも、ソーブランドで働きますか?」

「そ、そんなあ〜」

「町田リカ、今回2回連続で失敗したというのは問題だな。あけぼのストアルートはしばらく撤収しろ。俺は西原さんと相談してくる」

町田リカはしゅんとなって帰っていく。

「パオ、女はブクロのソーブランドに売るか?」

「賛成。命を奪うよりはありがたいほうね」

「あの町田リカという女ね。私も賛成ね」

冷たい表情で女が入ってきた。西原である。

「せっかくあけぼのストアルートを開拓したけどしばらく撤退ね」

「新たなルートは塔和大学にしようぜ。イケメンホストから女を狂わせたら男も狂うはずだ」

彼らの底知れない欲望は新たな犠牲者を招こうとしていた…。

「このアカポンタン!!」

「ひええ!!ドクロベー様お許しを〜」

謹慎中の三人組に『ドクロベー』なる人物から電話が入ったのは町田リカが一之瀬からつるし上げられている頃だった。

「お前達の失態はリブゲートの副社長から聞いたべ!!なんという体たらくだべ!!」

「も、申し訳ございません…」

メアリージェーンはひたすら謝る。

「今回は副社長のお情けで謹慎だけで勘弁してやるが次に失敗した時はどうなるか分かってるな!？」

「は、はい勿論でございますドクロベー様」

「よ〜し、分かったらおとなしくしているべ。次の指示はまた副社長に仰ぐんだべ」

「ははあーっ!!」

電話は切れる、そしてその電話の向こうにはあの『闇のヤイバ』がいた。そう、彼が『ドクロベー』を名乗って声を変え、あの三人組に指示を出したり叱りつけていたのだった。彼は呟く。

「フツ、まあこんなところでいいか。奴らはまだ使い道がある…」

2

私服の3人を伴って背広姿の青年がマンションのインターホンの前に立っていた。

背広を身にまとっているのは小津魁。今までにない厳しい表情である。

「魁、呼び鈴を押してくれないか」

小津ヒカル(麗の夫)がすまなさそうに頼む。魁は婚約者の山崎由佳に事を預けると広志の部屋の番号を押す。他のメンバーが普段の私服なのに対して彼がこの格好なのは仕事の帰りに立ち寄ったに他ならない。手元で赤いステンレス製のRVギアの鍵を握り締めながら待つ。彼が車を置いた隣にはトラックを改造したワンボックス車があった。恐らく、ドン・ドルネロが乗ってきたものだろう。

「はい、高野ですが」

「俺達だ。入れてくれないか」

「分かった。待ってくれよ」

そして、数分後。現れたのは広志の支援を務めるバボンである。

「ヒロが待っているぜ」

「ごめん、わかば生命の立ち上げで連日徹夜なんだ」

「分かってるさ」

魁はオランダの生命保険会社と合併で小津ホールディングスグループのインターネット生命保険会社を立ち上げる事を決めた。最初は証券会社から始まって投信会社、経済新聞の次に金融サービス業として生命保険会社を立ち上げる事にしたのだった。

「魁っち、遅いよ」

中に待っていたのはヴァルハラ川崎病院の秘書課に勤める内藤悦子(ナイ)、斑目あかり(メア、斑目麗奈(メレ)の姉)の二人だった。

「ごめんごめん、わかば生命の立ち上げで忙しくてね」

「仕方がないさ。君の事はみんな分かっているさ」

片岡貢(ヴァルハラ横浜病院院長、横浜医科大学教授、包帯を自由に使うマジックが得意なためにメーミィといわれている)が諫める。中にはドルネロ、ギド・アブレラをはじめ、美墨なぎさ、雪城ほのか、九条ひかり、柴田竹虎・美月夫妻が控えている。広志は厳しい表情でドアを閉める。

「今から話す事は、他人に一言でも話してはならない。片岡先生を通じて真東夫妻からは協力の確約は得られている。また、桧山先生や乃木先生は麻薬『黄色い馬』で苦戦中ゆえ、外す事にした」

「この前、私達が横浜で買い物に行った時に『シルキーキャンディ』の売人が製造担当者から商品を引き換えていた光景を見て、摘発した事で何点か分かった事があるわ。まず、製造の受託費用はゾーダが知り合いに頼んで調べてもらったけど三洋銀行本店にある口座に振り込まれていたわ。どういう事が分からないけど、『あけぼののやぐら』という名前で振り込まれていたの」

「三洋銀行だって!?アメリカのギャングとかかわりがある証券会社とも関係があるなど闇社会とつながりがあると噂されている銀行じゃないか!!」

ほのかの話にヒカルが驚く。引き継ぐのはなぎさ。

「その通りよ。リブゲートとも旧東洋製菓売却に関して強い結びつきがあり、この前薬物法(作者注・実際この法律はありません。ですが実際は違法薬物の所持・販売は強く禁じられております)及び選挙法違反で摘発された杉山泰蔵は三洋銀行出身ね。さらに喪黒福子はいうに及ばずよ」

「お兄ちゃん、たしか東証二部に上場していた東洋製菓がリブゲートを吸収合併して社名がリブゲートになったけど、いろいろ噂された合併劇だったよね」

「そう、経営者の引退に目をつけたリブゲートは経営者から株式を買い叩いて、経営権を手にしたうえでバイオ以外の部門は全て大手の会社と合併にした。そして、あけぼののやぐらというなぞの振込先。一体どう繋がるのだろうか…」

「ヒロ、その意識不明だった黒杉君ってどうなったの?」

麗が聞く。片岡がすばやく引き継ぐ。

「彼は意識を取り戻して神奈川県警及びゴリラの事情聴取に応えており、昨日病院内で逮捕されていますが治療を受けながら国選弁護人の監視下で取り調べに協力しています」

「俺がブルースに頼んだ結果が出たんだ。フラビージョの関係について」

魁が年の離れたアメリカの友人、ブルース・ウェイン(ウェインコーポレーション会長でアメリカの政財界に広い人脈を持つ)を通して調べた結果によると、フラビージョは探偵事務所『オボロゲクラブ』に所属しているというのだ。

「オボロゲクラブか…。聞いた事があるぜ、そいつはかなりやばい事をやらされているぜ」

「ドルネロ社長」

「ここで言う麻薬とかといった話じゃねえが、盗聴や情報収集をやらされているらしい。ドギーが困り果てていたぜ。だろう、アブレラ」

「その依頼主が、オルバ・フロスト。『ニューウェーブ』という持ち株会社の元に広告代理店と『新時代出版社』をもつカリスマ社長だというのだ。だが、その依頼もほとんどリブゲートがらみだ。しくじったら後始末にとチャイニーズマフィアと関与している最大の暴力団大島田組が裏で絡んでいるのだから始末に負えないぞ」

「リブゲートの子会社か…。僕は今回の事件はいずれもリブゲートの動きと密接に関係しているのは間違いないと思うよ。僕のほうから小次郎君や楠木君に頼んで調べてもらっているけどなかなか尻尾がつかめなくて困ってたよ」

アブレラに答えるように竹虎がいう。美月が応じる。

「そうね。卒業生から『リブゲートに入社したらあまりに使い捨てがひどいからやめた』というクレームが殺到したわ。だから私の独断で千代田大学は推薦枠を返上したの」

「そうか…。こうなったらこっちは怖い手段を用いる事もやむをえないな」

そうすると広志は携帯電話を取り出した。

「もしもし、高野です。ジョナサン議員はおらっしゃいますか…」

「なるほど、その事で僕に頼みたいわけだ」

「どうしてもこの事は調べなければならない。一応俺でも出来ないわけでもないが、俺が動いているとリブゲートにばれたら証拠隠滅をやられてしまう可能性が高いから」

「分かった。恭平にも調べてもらうよ」

「頼む。親父さんに迷惑を賭けてしまう事になってしまい申し訳ない」

「ここまでかしこまる事はないよ」

広志は電話を終えるとみんなを見回した。

「アメリカではそのほかにもレックス・ルーサーにも頼んで置いた。彼なら確実に情報を調べられる」

「彼はプライベートでシンクタンクを持っているから最高だろう」

広志のアメリカにおける人脈は穏健派を中心に堅い。穏健保守派でアメリカ大統領を厳しく批判し続けるレックス・ルーサー(ルーサーコーポレーション会長)、全米屈指のメディア『デイリー・グローブ』の編集長・CEOのクラーク・ケント、穏健改革派でアメリカ下院議員のジャック・ネイピア(第三勢力「独立党」党首)、弁護士事務所を経営するハービー・デント弁護士、さらにアメリカの科学者のビクター・フリーズと人脈は半端じゃない。さらに、アメリカ前大統領のJ・バートレットが広志のいわばアメリカにおける留学先のホストファミリーでもあり連帯保証人を務めていた。故に広志は美紅と一緒に敬虔なクリスチャンになったのだ。故にベネット・アメリカ大統領の天敵とも言われているのだ。

「日向様、こちらへどうぞ」

新時代出版社社長室に髪の毛の長い初老の男と女が入っていく。

「久しぶりです、無限斎先生、おぼろさん」

「また仕事でしょう。用件をお伺いしましょう」

「話が早い。実は、ある病院の内偵をお願いしたいんです」

「それって…」

社長のオルバ・フロストは資料を取り出した。

「僕が理事を務めている元斗会の経営する『サザンクロス病院』の院長が最近不審な動きをされていてね、僕は何度も事情を問いただそうとしましたが何も明かしてもらえません。故に、荒っぽい手法ですが調査をお願いしたいのです」

「そんな…」

「もちろん、料金は弾みましょう。あなた方の債務は全て解消し、通常の二倍の報酬は約束しましょう」

「依頼主は誰なんですか」

「それは、僕の口から話すわけには行きません。その他に不審な動きをしている連中がいますので、その動向も含めて調査していただきたいのです」

「馬鹿な事を!おぬしらの腹の中は最初からそんな事は考えておるわけがなからう!!」

無限斎が怒り出す。だが、オルバは狡猾だ。

「そこを何とか先生たちのお力添えでお願いしたいのです。今まで僕は様々な伝手で調べてきましたが埒が明かない。最後の伝手で先生にすがり付いているのです」

「何という奴らだ!」

「お兄ちゃん、切れちゃだめだよ。仕事なんですよ」

オボロゲクラブ事務所内では吼太が壁を殴りつける。

妹の鳴子が諫める。何しろこの任務は理不尽極まりないのだ。チューズーボが呆れながらぼやく。

「とにかく汚れ役を俺達に押し付ける意図が見え見えだ。この前オルバの野郎の車を追いかけていたらホストクラブに辿り着いたぜ。一体どうなっていやる」

「それってマボロシクラブの事?」

フラビージョが聞く。

「ああ。凶星だぜ、ひょっとしてこの前お前が巻き込まれた事件って…」

「あたしやばかったよ。まさか麗の弟の友達がGINの最高運営責任者だなんて思わなかった」

「その時話せばよかったのに」

野乃七海がぼやく。

「んな事言っただって〜。あたしだってやばいんだよ」

「仕方がないだろう。おぼろさんだってこんなスカートめくり、好きでやっているわけじゃない」

「鷹介の言うとおりでな…」

サーガインが呆れながら話す。その腰には電子低周波治療器が張られている。彼は慢性の腰痛なのだ。

「ただいま、また仕事?」

ランドセルを下ろして聞いてくる少年。

「マンマルバ、病院の内部調査を頼まれたんだ」

「サザンクロス病院?あすこやばすぎるよ」

「最近の薬害が頻発するスポットと来ているからな」
霞一鍬が呆れながら話す。マンマルバといわれた少年は無限斎の養子なのだ。おぼろが無限斎に聞く。
「院長にはすでに装置は仕掛けてあるらしいわ。後は伝通院と看護師の魚住愛、それと研修医の水野亜美や…。父ちゃん、どうする?」
「相手はなかなか尻尾を見せない。だが、伝通院は何とかなるではないか。彼はグレートカメラを使っているらしい」
「そうか、バッテリーをだめにしまえばいいわけね」
ウェンディーヌが手を叩く。彼女の策略は蛇のように狡猾なのだ。一鍬の双子の兄一甲がうなずく。
「後は盗聴器入りのバッテリーにすり替えてしまえば一巻の終わりってわけだ。あとは七海が鍵をこじ開けてバッテリーを壊してしまえば任務はたやすい」
「装置を早速つくろう」
動き出す仲間達。
「任務担当は伝通院についてはフラビージョと七海、シン院長は鷹介とサーガインでやるのじゃ。あとのメンバーはオルバがらみに回す」

「ふん、金のためなら仲間も売る犬ですか」
「同情するなら金をくれ。俺は金の為なら何でもする」
サタラクラがひざまずく光景を冷笑するオルバ。
「で、彼らは仕事をしていますか」
「してるさ。とにかくオルバさまの犬になってるさ」
「飼い犬もいつかは牙を剥くといいますからね。せいぜいパブロフの犬のように金で釣らしておきましょう。今回の成果に免じて、あなたへの債権を一部放棄しましょう」
「ありがたいぜ。では、またやってくるぜ」
サタラクラが歓喜の表情を内心冷笑するオルバ。サタラクラの債権を闇金融から買い叩いていたから今や彼はオルバの犬に成り下がっているのだ。その彼と入れ替わりに編集長の三島正人が入ってきた。
「失礼します、今入り口ですれ違いにサタラクラが出て行きましたが何を仰ったのですか?随分うれしそうでしたが」
「フツ三島君、所詮奴は犬さ。使い捨てである事にも喜んで甘んじる」
「成程、そうでしたな。ま、従順に我々に従いさえすれば良いのですからな」
「そういう事だよ、三島君」
二人は哄笑した…。

そして、ホテルリック内部の「怪談亭」では…、前回の盗聴の教訓からごく一部にしか知られない面談が行われていた。この事を知っていたのは女将の吉原侑子だけであつた。
「今週の週刊北斗を見ましたか?まさかドルネロと高野広志が関係あるとは思いませんでしたな」
「あの男はなかなか捕らえられない相手だから嫌い」
ハルヒが愚痴をこぼす。彼女が苦手な相手は海原雄山やドルネロに代表されるようにきちんとした信念の持ち主である事は明らかだった。そういう連中が信奉する輩が大体ろくでもないのは明らかでもあつた。
「その分、金は正直ってわけだ」
「スパンダム社長、今回の依頼は何?」
ハルヒに取り入るスパンダム。
「実は新たな薬を開発中でしてね、その認可をお願いしたいのですよ」
「ああ、インフルエンザはもちろん、肺炎ウイルスを駆逐する事が出来る新たな薬の事か」
「はい、そうなんです。ブルーノ、説明してやれ」
「はい社長」
この席にスパンダムは開発部部長のブルーノを連れてきていたのだった。
「今回の薬は去年から開発部研究所で対インフルエンザ用として創られたのですが動物実験の結果、肺炎ウイルスにも効果がある事がわかり、今その方面でも使えるかどうかの研究が最終段階に入っております」
「そんな話はどうでもいいわ。とにかく、認めさせたらどんな見返りがくるのよ」
ブルーノの説明にうんざりしたハルヒがスパンダムに迫る。
「もちろん、私の持つCP9製薬の株式と、リブゲート株式ですよ。今なら株価は安い。安く買って高く売ればいいでしょう。表面上は私の名義にして売っておきましょう」

「それなら私も賛成ね。こちらは壬生国の議員の猫田、和井呂、国崎の3人に献金してCP9の新薬を優先して認可させるようにもっていったわ。これで株価は上がって私達はぼろもうけよ」

喪黒福子が同調する。ピアスが警告する。

「さすが喪黒社長でしょう。ですが気をつけるべきですな。ゴリラが動いておりますからな」

「骨の強い検事どもを早く始末してくださいよ。ブンヤどもやゴリラの吉川氷柱で我々はうんざりなのに、これ以上厄介ごとはたくさんです」

「ああ、あの久利生公平という輩か。女とまとめて左遷させてやろうか」

「そうしたほうがいいかもね。せいぜいゼーラにでも追い払ったら」

「そうそう、奴らはやがてゼーラでこうなる」

根岸が割り箸を真二つに折る。今頃、新宿の焼肉店「風雲」では日本連合共和国の役人を招いたしゃぶしゃぶパーティが行われているだろう。だが、そのしゃぶしゃぶパーティのコンパニオンを務める女性が全裸で給仕するのだから始末に負えない。

これらを考えたのが喪黒福造である事は言うまでもない。だが、彼らはすっかり忘れていた。公権力を私物化する犯罪者を取り締まる公権力乱用査察監視機構の存在を…。

「よっ!」

「あら、ヒロさんじゃないですか」

その一週間後…。GIN本部の入るビルの名店街にテナントを構えるPANPAKAパンの店長兼パティシエ、日向大介は広志の顔を見て驚く。

「最近忙しいようですね」

「ヒロさんほどじゃないですよ。この前は誕生日プレゼントありがとうございます」

「いえいえ。お世話になってますからね」

いつも広志は来客があればPANPAKAパンでパンを買い、隣のコーヒーショップでコーヒー豆を買って自分で豆をひいてコーヒーを入れる。広志の足元で大猫が擦り寄る。彼らが飼っている「コロネ」という名前の猫だ。

「まさか、今日お客さん来るんですか」

「詳細はね…」

濁す内容から沙織(大介の妻)はすばやく目配せする。

「バボン、お客様からの連絡は?」

「先ほど品川近くといていたぜ」

「もうそろそろだろう」

バボンは部屋の掃除を終わらせていた。そこにインターホンがなる。

「久利生様がお連れ様とご一緒です」

「了解。では、応接間に迎えてください」

「はじめまして。高野です」

「いや、週刊北斗編集部からアンタの連絡先を教えられてアポを取って3日もたたずに面会が実現できるとはビックリしたぜ」

公平は驚いている。ツナサンドの置かれた皿とコーヒーを用意しながら広志は微笑む。

「あなたの評判は聞いておりますよ。まあ、今の私もあなたと同じリブゲートが敵になりましたからね」

「回りくどい話ですね。趣旨は私達を公権力乱用査察監視機構の一員に迎え入れる話なのですね」

「ビンゴ!」

いたずらっぽい笑みを浮かべて広志は微笑む。雨宮舞子は顔色を変える。

「このままではあなた方は間違いなくサウザーに殺される確率が高い。ならば、奴らの手の届かない身分をあなた方に保証し、我々とともに奴らと戦おうではありませんか」

「俺もそう考えている。でも、俺みたいな奴が果たして受け入れられるの?」

「全然。我々の組織は中学卒業後警察軍の教育を受けた人物もいれば、大学院まで出たトップエリートもいる。人材は豊富でね」

「じゃあ、外部との提携もありうる話ですね」

「ええ。警視庁特別捜査第一班、通称ゴリラや国連とも提携しています」

「国連だって!?」

公平が驚いている。広志はスカウトを決めた理由を話し始めた。

「この前、私とドン・ドルネロとの関係で報道があったでしょう。その際私はドルネロと一緒に週刊北斗編集部を訪問しまして、バット記者に事情を説明しました。その際に近くにおられた霞拳志郎氏からあなた方の存在を教えられました。そして、様々な資料を取り寄せた結果、GINの司法部門の司令塔としてスカウトしたいと決めました。ゴリウですら司法書士や検事がいますからね」

「確か黒崎高志捜査官と吉川氷柱捜査官でしょう」

舞子が応える。

「ご名答。あの二人は切れ者ですよ」

「捜査官としてもスカウトを決めたんでしょ」

「そう言ってしまうと欲張ってしまうでしょ」

広志はにやりと笑う。

「いずれにせよ、俺は加入を決めたぜ」

「ちょっと、即答がすぎますよ!？」

「このままなら俺達がサウザーから消されるのは時間の問題だぜ。ならば、こっちから行方をくらましたほうがいい」

「その、記事についての事はどうになりましたか」

「謝罪は求めませんでした。事実は事実ですから。ただ、私もドルネロも困惑していたという事実を伝え、今後の報道に教訓として残したいというコメントを出していただいて和解しました。そして、彼らも協力者になってくれる事になりましたよ」

「あんた、やられっぱなしには済ませないからしたたかなんだよね」

「そうか…。二人とも加入を決めてくれたか」

「霞さんの推薦した人材は優秀です。雨宮さんは優秀な秘書官になります。近々、弁護士の試験を受けるように勧める事になりそうです」

「その一言を聞いて安心した。一方で奴らの悪事は悪化の一途を辿っている」

「権力とダイレクトに繋がっていると証明されない限り、こちらは動くに動けない…」

苦々しい声で拳志郎は答える。広志も同感だ。

「リブゲートと政界を直接結びつける証拠が手に入らない限り、こちらは動けませんね。ただ、サウザー議員との賄賂がどういう形で出てくるか…」

一方、公平は日本連合検察庁に戻りある一人の初老の検事と話し合っていた。

この男の名は柊茂、通称『赤かぶ検事』である。何故そう呼ばれているかというこの男、飛驒高山の赤かぶ漬が大好物だからである。因みに彼も公平と同じく叩き上げの検事であり、公平は彼に信頼を寄せていて彼の事を『赤かぶさん』と呼んでいる。

「そうじゃあ…おみゃーさん公権力濫用査察監視機構に行くのがや」

と柊は名古屋弁丸出しで言う、彼は名古屋出身である。

「ええ、ここにいるのはもうヤバイっすから」

「でやろうなあ、ここにもサウザーやパロン影山っちゅう輩の魔の手が及んでるでなも。わしもアイツ等が嫌いじゃがこの検察庁が気になって仕方ないもんだでここにいる事に決めたでなも」

「そうですか…でも赤かぶさん、気をつけて下さいよ。奴等いつ赤かぶさんを目の敵にするか分かったもんじゃありませんよ」

「おみゃーさんに言われんでもわかつとるがや。だが問題は葉子の事でなも、『将を射んとすればまず馬を』って言葉があるきやらな、葉子がまず狙われるのは確実だで」

柊には妻、春子との間に一女二男がいて、長女の葉子は弁護士である。無論、時には法廷で争う事もある。

「赤かぶさん、その事俺からあの部署の連中に言っ時ましようか?奥さんにもボディガードをつけたほうがいいのかでは?」

「気持ちはいがのう、わしも法律にたずさわつとるんだで。それなりに対処するさ、それに女房と子供には心配かけたくなやーで」

「でも万が一って事もありますから言っ時ますよ。赤かぶさんも司法界には必要な人ですから」

「うれしい事言ってくれるでねやーか」

と二人が話している時に柊の携帯が鳴る。

「やれやれ、悪いがちゃっと失礼するで…はい柊です、え、逃げられた?おみゃーさん一体何をしとったんだがや!!はよう追っかけてちょ!!」

柊は携帯越しに相手を怒鳴りつける。

「どうしたんすか?赤かぶさん」

「いや、今取り扱ってる事件の重要参考人が法廷に出ようとしねーだで警察に身柄を確保してもらおうとしたらこのざまだ」

柊は苦笑しながら言った。

「何か忙しそうなので俺はこれで失礼します。あ、そうだ赤かぶさん、今度お会いした時は『あれ』を持って来ますよ」

と公平が言うと

「おお、『あれ』きゃあ!わしは『あれ』には目がねーでう。楽しみにしとるでよ」

と柊は言った。無論『あれ』とは彼の大好物、飛騨高山の赤かぶ漬の事である。

「CEO、これが新たに導入するパソコンの見積もり表です」

「ずいぶん意欲的な額ですね」

山梨県に本社を置く武田コンピュータの社長である新見隆と小山田武夫営業部部長が広志の元を訪問していた。広志は新たに立ち上げるGINの支部向けに新たなシステムを投入すべく動いていた。

「いいじゃない、この額で」

「確かに。だが、懸念材料はありますよ。あまりにもダンピングに等しいじゃないかとね」

「それをいってしまうと武田会長から怒られますよ」

苦笑いする武田信会長。最近ではゴリラと大型取引を成功させたのである。跡目争いで困っていた静岡のシステムエンジニア大手・今川家再建に長男の義信、織田家の信長の弟の信行、さらに松平信康の3人を確立して再建に成功させたのだった。それゆえ、武田コンピュータはエンジニアリングに強く広志は競争入札で選ばれた後にかなり厳しい注文もしていた。

「木下課長は面白いでしょうね。いつも現場で仙石係長と付きっ切りらしいです」

「あいつらは根っからの現場人ですよ」

「ところで棟居先生はどうですか?私の娘がお世話になりましたがだいぶの活躍ぶり」

「彼は同僚と一緒にまさか小学校教師から政治家になるとは思わなかったでしょうね」

新見が峠恭子に話す。広志は苦笑いしながら恭子に微笑む。そう、峠恭子はジョナサンと恭平の母親である。ちなみにジョナサンは病死した前の夫との連れ子でアフリカ人の血が流れており身体能力も優れていた。今の夫陽平は日本連合共和国上院議員だった人物である。

「彼らと恭平が同級生で、恭平の三顧の礼で連合共和国議会議員…」

「困った時には我々はいくらでも納税で協力しますよ」

武田はにやりと笑う。武田の経営してきた会社はいずれも経営黒字になっている。それゆえに通常の納税に加えて社会貢献として自治体に寄付をしていたほどだ。

「カッチャんは元気ですか?」

「あいつは大変だってこぼしていますよ。でも、現場を把握してから経営したいのが彼の希望です。だから頑張っていますよ」

武田の次男勝頼は買収した金泉堂という洋菓子店の現場見習いから勉強していた。今ではケーキを出して売っているほどだ。銀行員からケーキ屋さんのオーナーになって朝が早くなり経営面で融資を引き出すまで数字をあげてきた。

「件の絹飴で大変ではないか」

「この事でご迷惑をおかけして申し訳ありません」

「あけぼのストアやそのテナントの客から最近、その絹飴で摘発されるケースが多くなってきているのは何故だろうか」

「偶然なんかじゃないですね。恐らく…」

その瞬間、広志の携帯電話が鳴る。

「はい、もしもし高野ですが。何、自殺未遂だと!?分かりました、すぐに池袋に直行します!!」

「ここだ!!」

つなぎに身をまとった河東学人(『鬼神引越センター』社長)が広志に怒鳴る。

彼は竹虎に以前インターネット強盗犯で捕まえられた事があったが、竹虎から諭されて更生を果たし、今では美紅の支援を受けて少年院時代の仲間達や元暴走族のメンバーを雇い引越会社を立ち上げ堅実経営に徹して好調な売り上げを上げていた。彼は社長である以上に営業職でもあり引越スタッフでもあった。

「すまん!ガイシャの容態は!?!」

「救急車で搬出されたが最悪の状態だぜ。何しろ二人に奇襲食らったからな…」

「ガイシャは池袋のソーブランドに勤めていた町田リカ…?おかしいぞ!!」

広志はある種の違和感を覚えていた。まず、状況に違和感を覚える。自殺未遂を起こしたリカにハイエナのように襲い掛かった加害者がシルキーキャンディ中毒者の尻屋潔、龍ヶ崎たまこの二人だ。リカが何故見ず知らずの二人から襲われるのかが分からない。更に、つい最近まで務めていたのがあけぼのストアというのも気になる。

「直ちに血液検査を行うよう、ヴァルハラ東京の安田院長に連絡を!」

「ヒロ、リカちゃんは今どこに!」

「シバトラさん!彼女はヴァルハラ東京に搬出されています!!」

「あれから後、僕は調べたら大変な事が分かってきた!」

「分かりました。その事は後で話しましょう。とにかく今はソーブランドの聞き込みを行いましょう」

近くにはパトカーが止まっており、ひげ面の男がうなだれている。

「何だと!？」

あわてている藤堂の話からパオはゴリラのほかに見えざる組織が動いている事を悟った。近くには一之瀬がいる。

「ゴリラで俺達はひいひいななのに、一体お前ら何やらかしたんだ!?おかげでこっちは商売上がったりだ」

藤堂は池袋に店を構えるソーブランド店「DM」のオーナーである。

「代金はキャンセルさせてもらうぜ。パオ、何かあったらテメエが責任取れよな」

「ヒィ…」

電話が切れた後、一之瀬は厳しい表情だ。

「ゴリラ以外に見えざる組織が動いているのか…。始末にしくじったな」

「申し訳ありません…」

「まあいいさ。お前はベストを尽くした。後は俺達が次の手を打つまでの事だ」

「やはり、お前さんの指摘が当たったな」

「安田院長、とんでもない事になってしまいましたね」

「売人までシャブ漬けじゃ、たまったものじゃないな」

苦々しい表情で安田潤司(ヴァルハラ東京病院院長)は広志に話した。

「そうそう、もうそろそろ薬が足りなくなっているようだな」

「ええ、ビタミン剤とパルキュリアなしではまずいですからね。こいつも一種の麻薬みたいなものですが」

「パルキュリアはお前さんの命の綱みたいなものだからな」

パルキュリアとは広志の持病であるテロメアの異常を抑制する薬である。10年前のテロリストとの戦いの中で発病した病であり、広志はテロとの戦いの後にこの治療もかねてアメリカに留学したのであった。この病気の厄介なところは、成長が早いゆえだ。それゆえに病状が読みにくいのだ。

「まあ、言語障害と左足麻痺が残ったんじゃ厄介な事になるぜ」

「事情聴取なんて無理でしょう。こうなった以上、まずはあけぼのストアとサティスファクションから洗い出す必要があります。もちろん、マボロシクラブの陸の事情聴取は強化しましょう」

「そうか…。それなら、全ての意図が見えてくる…」

「今回のシルキーキャンディの販売ルートはサティスファクション・あけぼのストア・マボロシクラブに分かれますね。マボロシクラブの陸・涼介、あけぼのストアのリエちゃん、黒杉君、そして今回シバトラさんが検挙したサティスファクションの店長の央戸一郎…」

「なるほど、いずれもリブゲートの出資物件時だな」

財前丈太郎は陰しい表情だ。

「そこに今回のシルキーキャンディ取締に手心を加えられた若原が絡んでくる物件ですな」

城源寺恵三(日本連合共和国次期大統領、現内閣官房長官)がシバトラからの説明を聞く。広志は厳しい表情で話を聞いていた。松坂征四郎(GIN 前広島局長、現顧問、元建設相)がつぶやく。

「今回、この事件は単なる贈収賄事件にはとどまらない印象がするな…」

「ええ。サウザーの影、そして喪黒一族の暗躍。いずれもリブゲートが絡み、始末人が大島田組ですからね」

「わしは以前、小耳に挟んだ話がある。居合い斬りの達人で始末人の一人を聞いた事がある」

今津博堂(GIN 顧問の一人、右翼の大物だったが広志の組織立ち上げに賛同し、組織を解散の上全て GIN に譲渡した)がいう。

「トカゲという奴でしょう。俺も聞いた話です」

「トカゲ…!!」

「ゴリラの汚れ役は永井仁清だが、ここはわしに任せてくれ」

「そんな事はさせませんよ、今津さん」

広志は優しい笑みを浮かべる。今津の食生活を美紅も参考にしていて、最近ではほとんど和食にしているのだ。そこへ広志のスマートフォンに電話がかかってくる。

「どうやら、自殺未遂の動機が読めてきたぞ」

ドギー・クルーガーが電話に出ている。

「恐らく、急激な環境激変に彼女の対応が追いつかなくなったのもあるのでしょう。それと、巧みにマインドコントロールがされています」

「さすがだな。お前の推理はますますさえている。それと精神崩壊と来ては…」

「校長先生ほどではありません。先生、嫌な話になってくるのは避けられません」

高野広志の悲しそうな表情が見えて取れる。

「おそらく、ガイシャは精神崩壊していますから社会復帰は困難でしょう…」

「同感だ。言語障害と左足麻痺だから、介護は避けられまい…」

そこへ白鳥スワンがコーヒーを持ってくる。

「コーヒーが入ったので電話を切る。後でメールを送って欲しい」

「了解しました」

電話をおえるとコーヒーを飲むドギー。

「あの教え子でしょう」

「ああ。アブレラですらも成長したと認める男だからな…」

液晶プロジェクターからは日本から唯一の大リーグの球団となったウィンランド・ブラックスのリリーフエース、茂野吾郎の勇姿が見える。彼もまた警察軍大学付属高校の出身なのだ。

「霞さま」

「はい」

霞一甲は風邪薬を取りに行った。そう、彼らは盗聴のターゲットとして研修医の水野亜美を引き受け、マンマルバが風邪をひいた事にして、病院で盗聴をしてきたのだった。今日はその総仕上げとして、今まで盗聴してきたPHSに録音装置を加えた盗聴器を回収してきたのだった。

「では、この薬で最後になりますよ。気をつけてお大事に」

ネームプレートには『魚住愛』と彫られてある。

「兄者、トイレに行くか」

弟の一鍬がいう。男女共用トイレに行きながら二人は話す。

「件の人物はヴァルハラ千葉ニュータウンの関係者と接触しているようだな」

「ああ、やはりここの黒い噂に参らされたんじゃないのか。まあ、この事は伏せて置いてよからう」

「黒い噂となっちゃ我々も同じ事だが…」

「黒い噂、ですか…」

「!?」

ニコニコ笑いながらアメリカ人が近づいてくる。

「お前は一体!?」

「大胆不敵ですね。私はヴァルハラ本部の海外部門を担当するものでしてね」

そういいながら男はかばんに目を向ける。

「あなた方は何をしにきたのでしょうか。私は知り合いがここにいまして、研修期間が終わりになりそうなのでどうするか確認を取りに来たのですよ」

「アンタは、ケビン・ゼッターランド・久坂!」

「ようやく分かってくれましたか。では、あなた方はいったいどういう事でしょう。確かに、マンマルバくんは病気でしたが、軽症に等しいでしょう」

顔色を変える3人。その時だ。白いトレーナーをまとった少女が現れる。

「久坂先生、やりすぎよ」

「大野さん!?」

「へえ、未熟児だったのか」

「うん、それでそれ以来かかりつけのお医者さんに見てもらってるんだ」

大野リジェは笑って応える。父アスカと一緒に病院に検査に来ていたのだった。マンマルバとは小さい頃水浴びをした仲なのだ。

「切れすぎだぜ、久坂先生」

「仲代君、だが彼らは…」

「彼らが根っからの悪人なら、顔に出るさ」

仲代壬琴は研修医時代からリジェの担当である。だから大野家の信頼も厚く、仲代のヴァルハラ復帰の時期で調整に訪れていた久坂も信頼していた。

「分かった。君達の事は見逃そう。だが、もうかかわってはいけないぞ」

しかし、これは『オボロゲクラブ』にとって失態の最初に過ぎなかった…。

「オボロゲクラブと思しき連中が暗躍を始めた？」

「ああ、ヒロの不安が的中した」

真東輝からの連絡を受けて広志は厳しい表情になった。やはり、ここは自分で動くしか選択肢はない。

「ケビンがとがめたので彼らは引いてくれたが、どうも新薬がらみの利権争いも絡んでいそうな雰囲気だね」

「そうですね、輝先生。あの病院には何があっても驚くに足りませんね」

「一之瀬店長はいるか」

低音の利いた声で大男がヌウツと入って来る。大島田組の中心組織・中王新重会の組長を務める中城である。その上部組織はチャイニーズマフィアであるのは言うまでもない。

「はい、おお、中城先生ですね」

「愛人と一緒だぜ」

「では、プレミアムコースを用意しましょう」

鋭い目つきの女が入ってくる。テレビでは占い師として知られる小田桐響子である。だが、彼女の闇の顔は大島田組の資金を隠すために休眠状態にあった宗教法人『あけぼのの櫓』の理事長だった。そこから受け取る莫大な資金がある限り彼女のテレビでのギャラは安くつくのだ。

そのおかしさに気がついてヤマトテレビは出演を依頼しなくなったが、他の放送局は会いも変わらずもてはやしているのだった。しかも、あけぼのの櫓にネズミ講に等しい脱法ビジネスまで加える始末である。ゆえに彼らの組織は笑いが止まらない。それも無理はない。リブゲートの久世・西原姉妹が考えた収入システムである。

「田沼、『あけぼのの櫓(やぐら)』の収益は？」

「休眠期間の債務は先月で完済しています。それにしても久世副社長の頭の賢さには参りましたな」

「兄弟の『白い教団』は解散されて土地建物は競売にかけられているようですが」

「ふん、関係ないさ」

「こっちはシルキーキャンディの拡販を開始したわ。件の塔和大学だけだね」

「秀樹の事か。まあ、こっちで伝説の20人斬りを果たした奴だ。研究員よりホストがお似合いだな」

一之瀬は不敵に笑い出す。そう、あけぼのの櫓を悪用したマフィアの資金洗浄が進んでいたのだ。そのクレームが関東連合警察に頻繁に入るのだが警察は民事不介入を盾に何一つ動かない。

GINにその情報が流れているのは言うまでもなかった。広志は水面で捜査をさせていたが確たる証拠が何一つない。

「へえ、新たな住民は君たちなのか」

アメリカ人が食事を取っている。広志のかつてのライバルで今は美紅やフラガー族と共同で企業再生ファンドを立ち上げているマルス・ベネットである。

「朝から迷惑をかけてすまない」

「大丈夫さ。僕の隣がエバンス卿の家だから慣れている。もう少しきれいにしてくれたらいいのに」

舌を出すのは野田恵。

「お前、まだ幸せだぞ。こうして忠告してくれる人がいるだけな」

「望先生、今日は何時に戻ってきますか」

「大学の講義次第だが、20時以降になりそうだな。ワイフには弁当を作ってもらっているさ」

そう、このマンションは中学校跡地なので給食室がある。その給食室を生かして美紅たちは調理を共同でしているのだ。はげ頭で苦笑いするのは永井仁清。鳴瀬望はその仁清にいじられている。

「ここにいと金がたまってしまうがな」

「仁さんはそうでなくても貯蓄と投資が趣味でしょ？」

美紅に突っ込まれて苦笑いする。

「まあ、ドルネロと比べたらかわいいもんだがな」

「新たなスポンサーは見つかりそうですか？」

「そうだな…。この前天草零って男が申し出て、今つばさ製薬がスポンサーになる事が確定している。ここがホームコンサートになるのは基本になりそうだな」

「音響も抜群、椅子もパイプ椅子で十分でしょ」

広志は廃校となった中学校からパイプ椅子や机を入手していた。そこまでやるのかと思うぐらいコンサート整備に挑んでいた。それも無理はない、彼らから話を聞くと以前のスポンサーだった企業がリブゲートに買収されて撤退した事から彼らの所属オーケストラが分裂したというのだ。

「3年前のオリエンタル製薬の破綻劇にはおかしな点が見られるがな…。数字上ではありえない事ばかりで違和感がある」

「数学の先生の鳴瀬先生もおかしいと思うんですか」

「まあ、俺は一応日商簿記1級を持っているのだが違和感を覚える事ばかりだ。まず、不渡りになるはずがないものが急に不渡りになったりするというのがおかしい。メインバンクのつながりも確認する必要があるな」

望は厳しい表情で言う。

「CP9と闇の世界が相当繋がっているんだらうな」

「僕もそう思う。久々にヒロと話したが、相変わらず一つにとどまる事を知らない意味で闇の世界は深刻だ…」

彼がそれを実感したのが投資ファンドの第一号となった建設企業だった。アメリカのゼネコン最大手ブッシュ社に売却する事が決まっているのだが、社長が賭博にのめりこんでしまい株式の大半を闇金融に握られてしまったからだ。その債務や従業員の給与などの債権を株式化して、買収し経営再建させてからアメリカのブッシュ社に売却を決めたのだが社長は再建時に引責辞任に追い込まれた。マルスは営業職としてとどまるように説得したが彼は拒絶し、今は外注ワーカーと発注先の会社との中間のとりまとめを行う会社を立ち上げている。

「闇の世界というのは深刻ね…」

「同感ですう…」

「……」

数日後の夕方、関東連合議員会館のとある一室で一人の女性がパソコンの画面に釘付けになっていた。無論この部屋には彼女以外誰もいない、が彼女は部屋を見渡す。何かを探しているようだった。

「…ふう」

彼女はため息をついて胸をなで下ろす、が顔色は悪かった。

(…どうにかしないと)

と彼女は心の中で思いながら自分の持ち物をまとめてパソコンの電源を切り、部屋を出て行った。一体彼女はパソコンで何を見たのだろうか？そしてこれが彼女にとっての運命の分かれ道になると彼女自身も思いもしなかった…。

編集者あとがき：今回、再編集をかける際バランスを重視させて頂きました。同時にアップデートを行った作品と前後が重なるように完成させています。

今回最後に出てくる女性は今後の話で大きな鍵を握ることになります。さて、次回は17.5話及び18話を統合予定です。

主な著作権者明示

『フロントミッション オルタナティブ』 スクウェアエニックス

スーパー戦隊シリーズ (C)東映・東映エージェンシー・テレビ朝日

それが答えだ! (C)フジテレビ

傷だらけの仁清 (C)猿渡哲也・集英社

のためカンタービレ (C)二ノ宮知子・講談社

キングダム (C)原泰久・集英社

夜王 (C)倉科遼・井上紀良・集英社

霊能力者小田霧響子の嘘 (C)甲斐谷忍

人間の証明 (C)森村誠一

ゴッドハンド輝 (C)山本航暉・天碓莞爾 構成、監修 講談社

MAJOR (C)満田拓也・小学館

『雷神～RISING～』(C)真船一雄・講談社

『内閣権力犯罪強制取締官 財前丈太郎』 (C)原作:北芝健、漫画:渡辺保裕 コアミックス

『赤かぶ検事奮戦記』 (C)和久峻三

沈黙の艦隊 (C)かわぐちかいじ・講談社

シバトラ (C)安童夕馬(原作)・朝基まさし(作画)・講談社

プリキュアオールスターズ (C)ABC・東映アニメーション

P.S.羅生門 (C)矢島正雄・中山昌亮・小学館

バットマン・スーパーマン (C)DC コミックス

The Piano (C)ローズマリー・ボーダー